

1. はじめに

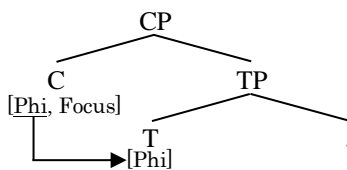
生成文法理論では元来、「命題としての文の構造と意味」の解明がその中心的な作業課題とされ、とりわけミニマリストプログラム以前の統語理論では、話者の視点や文と文の関係など、文の発話・語用機能が論じられることはほとんどなかった。しかしながら、近年、Split CP 構造を提案した Rizzi (1997) に代表されるように、統語構造と語用機能のインターフェイスが積極的に考察されるようになってきている。

本稿では、ヒトの知的計算の解明に加えて、情報表出・伝達・語用機能を解明することがミニマリストプログラムにおける統語論研究の一つの方向性であるとする理論的立場に立ち (cf. 長谷川 (2007))、統語システムにおいて中心的な役割を担っている Phi 素性一致操作と A 移動操作に関して、その適用の際に語用論的要素がどのように関わっているのかを明らかにする。この点に関して、英語の統語システムを見る限り、定形動詞は主語要素との間で Phi 素性一致を起こし、主語要素は TP 指定部へ義務的に A 移動を起こすなど、語用論的要素が統語操作の適用に関与する余地はないように思われる。しかしながら、日本語統語論研究に目を向けてみると、Miyagawa (2005) が焦点素性によって誘発される A 移動タイプのスクランプリングの存在を主張している。また、話し手と聞き手の関係性やポライトネスが深く関わる尊敬語化現象を、Phi 素性一致現象の一種として見なす分析も存在するなど (cf. Harada (1976), Ura (2000), etc.)、両者の関係性を強く示唆する分析が数多く提案されてきている。本稿では、この統語操作への語用論的要素の関わり方に関する日英語間の相違性について、Miyagawa (2010, 2017) が提唱する Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化の観点から捉えることを試みる。そして、尊敬語化現象の存在を手掛かりに、チベット語ラサ方言への応用可能性について検討し、言語類型論的観点から本分析の妥当性を立証する。

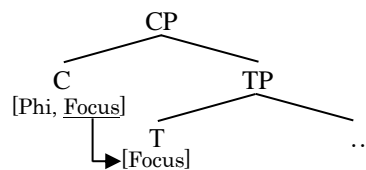
2. Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化

Miyagawa (2010, 2017) は、自然言語の普遍性を捉えるにあたり、Strong Uniformity を提案する。それによれば、すべての言語は Phi 素性や焦点素性といった文法素性を共通して有しており、それらは顕在的に具現されることになる。また、言語間の相違性については、現在広く採用されている素性継承システムに関して、フェイズ主要部である C から T へ継承される素性のタイプが言語ごとにパラメータ化されることで生じるとし、自然言語は主語卓越言語と焦点卓越言語に二分されると主張している。

(1) a. 主語卓越言語: (英語タイプ)



b. 焦点卓越言語: (日本語タイプ)



素性継承システムにおいて、すべての文法素性はフェイズ主要部に生成されることになるが、このパラメータ化に基づくと、英語をはじめとする主語卓越言語では、Chomsky (2008) や Richards (2007) によって従来想定されてきたように、C から T へ Phi 素性のみが継承されることになる。それに対して、日本語などの焦点卓越言語では、(1b) に示されているように、Phi 素性の代わりに焦点素性が継承されることになるとしている。そして、この理論的枠組みに基づくと、両言語タイプ間で観察されることになる様々な統語的相違は、この継承される素性のタイプに関する言語間の相違によりもたらされると分析されることになる。

3. A 移動現象と Phi 素性一致現象に見る語用論的要素の関わり方に関する言語間変異

まずは、TP 指定部への A 移動を誘発するメカニズムについて確認し、そこでの語用論的要素の関わり方を考察したい。当該移動は一般に、T の有する EPP 素性が C から継承された素性と連動し、その一致関係を確立した要素を指定部位置に繰り上げることで生じると分析される。そのため、素性継承システムのパラメータ化に従うと、Phi 素性が継承される主語卓越言語では、T が Phi 素性を有した候補の中で、最も近くにある要素と一致関係を確立し、その一致した要素が指定部位置に繰り上がることになる。主語要素は一般に目的語要素よりも相対的に高い位置に基底生成するという点を考慮すると、このタイプの言語では、必然的に主語要素

が TP 指定部へ A 移動を起こすこととなり、結果として、比較的固定化された語順が生成されることになる。

それに対して、C から焦点素性が継承される焦点卓越言語では、T による一致関係の確立に焦点素性が関与することになる。そのため、T は最も近くにある焦点要素と一致関係を確立し、その一致した要素が指定部位置へと繰り上がる。したがって、主語要素ではなく目的語要素が T から最も近い焦点要素である場合には、その目的語要素が一致関係を確立し、主語要素を越えて TP 指定部へ A 移動を起こすことになる。このように、焦点卓越言語では、TP 指定部が主語要素か非主語要素のいずれかによって占められることになるため、結果として、比較的自由的な語順が生成されることになる。また、語用論的要素の関わり方については、少なくとも統語構造を構築する Narrow Syntax の段階での関与は許容されない主語卓越言語に対して、焦点卓越言語では A 移動を誘発するトリガーとして直接的に関与することになる。

次に、Phi 素性一致現象における語用論的要素の関わり方について考察したい。先に確認したように、主語卓越言語では、Phi 素性が T へ継承されることになるが、T は相対的に高い位置に基底生成する主語要素と必然的に一致関係を確立することとなり、語用論的要素が一致操作に関与する余地はない。一方、焦点卓越言語では、素性継承システムのパラメータ化に従うと、Phi 素性がフェイズ主要部である C に留まり続けることになる。そのため、Phi 素性一致操作についても、主語卓越言語とは異なり、CP 領域内で適用されることになる。ここで、Miyagawa (2017) に従い、話し手や聞き手が項として選択される Speech Act Structure (cf. Ross (1970)) を導入し、それが CP 領域の上位に生起する統語構造を仮定したい。この仮定に基づくと、焦点卓越言語では Phi 素性を担っている C が、Speech Act Structure の主要部である SA と同一フェイズに位置することになるため、両者の連動が可能になる (cf. 三上 (2018))。その結果、当該言語タイプでは、日本語における尊敬語化現象のように、Phi 素性一致現象に話し手と聞き手の関係性といった語用論的要素の関与が許容されることになる。また、本分析は主語卓越言語における Phi 素性一致現象への語用論的要素の関与不可能性についても説明可能で、CP がフェイズを形成するとした場合、当該言語タイプにおいて Phi 素性を担っている T は Phase Impenetrability Condition により転送操作の適用を受けることになる。その結果、T は SA と同一フェイズに位置することができず、両者の連動が不可能となるために、Phi 素性一致操作への語用論的要素の関与が許容されないということになる。

4. 言語類型論的議論への拡張: チベット語ラサ方言への応用可能性

ここまで本稿では、Phi 素性一致操作と A 移動操作を取り上げ、それらが適用される際の語用論的要素の関わり方に関する日英語間の相違性について、Miyagawa (2010, 2017) が提案する Strong Uniformity と素性継承システムのパラメータ化の観点から捉えることを試みた。そして、日本語における焦点素性によって誘発される A 移動タイプのスクランプリングや語用論的要素が関与する尊敬語化現象の存在はいずれも、焦点素性が T へ継承され、Phi 素性が C に留まり続けることになる焦点卓越言語の特性により統一的に説明されると主張した。

この尊敬語化現象について、林・南 (1974) は、日本語に特化したものではなく、韓国語やチベット語等、様々な言語で観察されるとしている。したがって、本稿の分析に基づくと、尊敬語化現象が許容されるこれらの言語では、日本語と同様に、焦点素性によって誘発される A 移動現象が観察されるのではないかと予測されることになる。本稿では、この予測の妥当性について、チベット語ラサ方言を例に考察したい。

チベット語ラサ方言は、尊敬語化現象以外にも、日本語と類似した統語的特徴を示すとされる。DeLancey (2003) は、ラサ方言が示す語順について、基本的には SOV 語順であるものの、動詞前位置の語順は本質的に自由であるとしている。この語順の柔軟性は、当該言語が日本語と同様に、「スクランプリング言語」であるということを示唆するが、Cable (2009) は、ラサ方言におけるスクランプリングにおいて、それが適用された要素が A 束縛し得るということを指摘し、当該言語におけるスクランプリングの A 移動特性を主張している。この事実は、両言語現象の存在が焦点卓越言語の特性から統一的に説明されることとした本稿の分析が、チベット語ラサ方言にも応用可能であるということの意味すると同時に、Miyagawa (2010, 2017) により提示された言語の捉え方が言語類型論的にも有用であるという可能性を示唆することになる。

主要参考文献

Cable, Seth (2009) "The Syntax of the Tibetan Correlative," *Correlatives Cross-Linguistically*, John Benjamins. / DeLancey, Scott (2003) "Lhasa Tibetan" *The Sino-Tibetan Languages*, Routledge. / 長谷川信子 (2007) 「日本語の主文現象から見た統語論: 文の語用機能との接点を探る」, 『日本語の主文現象』, ひつじ書房. / 林四郎・南不二男 (1974) 『世界の敬語』, 明治書院. / 三上傑 (2018) 「焦点卓越言語としての日本語と主語尊敬語化」, 日本英文学会東北支部第 72 回大会 Proceedings. / Miyagawa, Shigeru (2017) *Agreement Beyond Phi*, MIT Press.